

中学生のハンドボール指導における左サイドシュートの運動発生に関する 例証分析的研究

保健体育専修 2512030

熊谷智史

序論

研究動機・先行研究の検討・研究目的

筆者はハンドボールを始めた当初からサイドというポジションを主に任され、中でもシュート角度がない状態からゴールエリアに跳び込んで自らシュート角度をつくり、キーパーとの駆け引きによってシュートを決めることに醍醐味があると感じてきた。その醍醐味について興味を抱き、以前の研究においてサイドシュートを8つに類型化した。しかし、これはサイドシュートの構造体系の“引き出し”を持つことにつながっただけであり、実際の指導場面で生かせていないというのが現状である。そこで、構造体系に基づき、学習者にどのようにサイドシュートを伝えれば、それを習得していけるのかという指導の方法に興味を抱いたことが本研究における動機である。また、これまでスポーツ運動学会においては事例研究が複数行われているが、その内容は器械運動などの指導法、あるいは球技におけるチームマネジメント法等に留まっている。以上から、球技の指導法に関する事例研究があまりなされていない点、そして金子の発生論的運動学の視点から研究されているものがほとんどみられないという点が本研究を行う契機となった。

したがって本研究の目的は、発生論的運動学の立場から左サイドシュートの指導について事例を挙げて分析・考察することにより、学習者にはどのような「創発能力」を発生させるのか、そのためには指導者側のどのような能力が必要とされるのか、さらに両発生能力がいかに関係しているのかについて明らかにすることである。

研究方法

本研究では、秋田大学教育文化学部附属中学校1年のT君を対象とし、その指導場面(2012年4月から2013年7月における約1年3ヶ月)をビデオで記録して原資料とした。マイネル(Meinel, K., 1960)による印象分析、運動カテゴリー的把握に基づく運動観察を中核とした例証を分析することによって、学習者の「創発能力」と指導者の「促発能力」、および両者の関係を発生論的運動学の立場から読み解いていく。そして、例証分析を行う際には私的な主観に陥らないように、「あたかも私や我々がその場面で動いているかのような感じ」で筆者と指導経験の長い佐藤と共に間動感的に分析・考察していく。

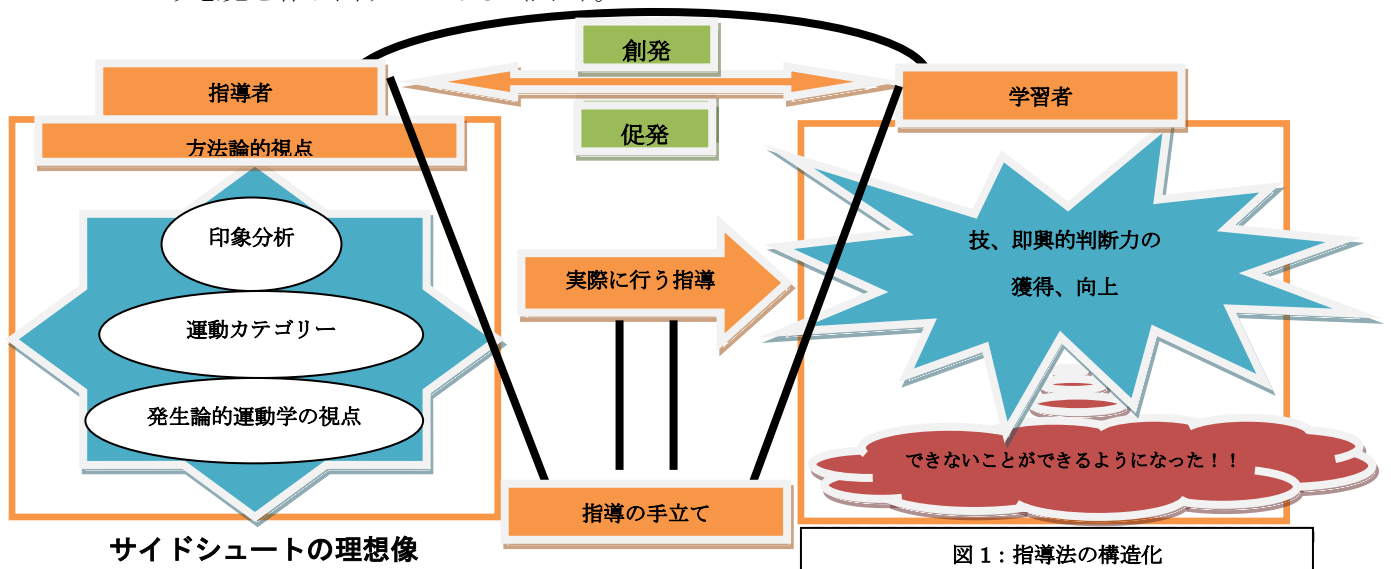
本論

発生論的運動学における例証分析的研究の内容と意義

発生論的運動分析というものは、「人間の生命的な身体運動そのものの分析を主題化しようとしており、今ここに動きつつある現在形の運動が主題化される」とあるように、質的研究という側面をもっている。本研究において主題化しようとしているのは、指導者たち

と学習者の間の出来事を基にして起こる運動指導場面における実践的な諸問題である。したがってそこではこの発生論的運動分析が重要となる。また、「分析する人が、その対象を私の運動にしようが、他者の運動にしようが、運動感覚能力をもっていなければ発生論的運動分析に関わることもできない」ともあるように、運動発生には伝え手にとっても、受け手にとっても不可欠なものであり、両者の相互関係の成立が必要不可欠であるといえる。

そこで重要となるものが体験そのものに迫り、なぜといった問題を研究することが可能とされる「例証分析」である。例証分析では指導者と学習者が間主観的に関与しながら相手の体験しつつあるものを把握することが可能である。この中に「関与観察」と「エピソード記述」を盛り込むことが非常に効果的であり、起こった出来事の一つを捉えて共同観察を行い、そこから共有できる真実を抽出し、観察することが客観的な立場で分析することにつながる。そして運動の“本質”を見抜くことにつながるのである。私たちが体験する物事は、もう二度と同じことが起こることはない歴史的一回性である。このようなもう一度再現しようとしてもできないような体験を例証分析に取り入れることが大切なのである。体験に密着し、指導者たちと学習者が共鳴しあい、深く研究していくことが例証分析の意義であるといえる。そしてこの過程が学習者の「できないことができるようになった」という感覚を作り出すのである（図1）。



サイドシュートの理想像

図1：指導法の構造化

サイドシュートの運動の組合せは、「助走」、「準備局面」、「主要局面」、「終末局面」、「受け身」と大きく5つの局面に分けることができる（図2）。

空中局面（ジャンプシュート）

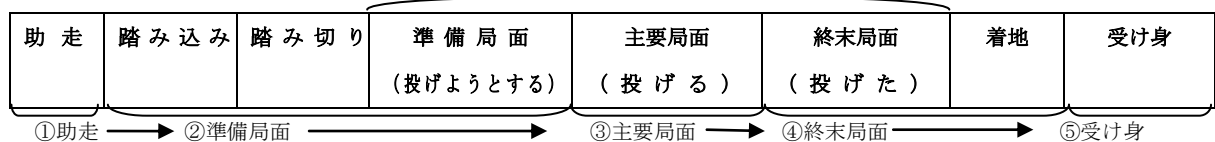


図2：サイドシュートの運動構造

「助走」の位置は、ゲーム状況やディフェンスの干渉の程度によって使い分けるべきものである。パスをもらう前から助走を始め、より早くシュートモーションに入ること、またはスピードに乗って主要局面に入ることが重要である。「準備局面」は、その状況に応じた歩数で踏み切り、ゴールキーパーラインに平行にジャンプをする。この際にディフェン

スの干渉を避けるために、ボールを持った利き腕を先行させて力強く踏み切り、頭の反対側にボールを投げる位置に準備するテイクバックを行う。導入動作によって本来のスローを有利な状態に準備することがこの局面において重要性を担っている。「主要局面」は、ボールにしっかりと体重が乗るように、投げ下ろした腕をだんだんと伸ばし、力強く手首のスナップをきかせ、指先に至るまで勢いを伝え、シュートコースをコントロールしていくことである。「終末局面」は、シュートを打った後のフォロースルーであり、「主要局面」での勢いを体で受け止めることが重要となる。「受け身」は、怪我を防ぐために、例えば右利きのプレイヤーの場合は、左足に続いて右足でジャンプの衝撃を受け止めた後に右手、尻、腰、背中と順番に倒れ込んでいくことである。

上記のサイドシュートの理想像と T 君の実態を踏まえ、T 君とコミュニケーションを図りながらすり合わせを行うことで目標像を設定し、実際の指導にあたった。

指導実践における実際の指導法

筆者らと T 君の間で設定した目標像に近づくために呈示した指導法は以下の五つである。

- I 「対面パス」：ボールを投げるにあたって順次性のある「運動伝導」やリズムカルな「運動リズム」の感覚をつかむ。
- II 「出前シュート」：テイクバックで肘が下がらないようにするため、利き手と反対側の手でボールを“出前”のように添えるようにする。
- III 「倒れ込み」：シュートを打った後の受け身。シュートと倒れ込みを組み合わせることにより、さらにシュート角度をつくる感覚をつかむ。
- IV 「一步踏み込み“スライス”シュート (1)」：ゴールの横から“スライス”して腕を振ることにより、順次性のあるサイドスローでボールを投げる感覚をつかむ。
- V 「一步踏み込み“スライス”シュート (2)」：IVの発展で、サイドスローと倒れ込みを併せて行うことにより、さらにシュート角度をつくってシュートを打つ感覚をつかむ。

以上の呈示により、T 君は基本的なオーバースローを確立させ、更に左サイドシュートにおけるサイドスローというわざ幅の習得に至ったことから、運動修正の運動発生を確認することができた。

指導の結果

例証における創発能力の発生様態

学習者側に必要とされる創発能力については、シュート時における“間”のつくりにおいては「体感能力」の中の「気配体感能力」の発生、そして「リズム化能力」の発生を確認することができた。また、シュートに対する取り組みにおいては、「コツ創発能力」の中の「直感能力」と「修正能力」の発生、そして「動感分化能力」を確認することができた。そして、キーパーに応じてオーバースローやサイドスローを使い分けた点からは「カン創発能力」の中の「先読み能力」を、「私は狙った所に打てる」という感じを掴み、シュートを決めることができた点からは「伸長能力」の発生、そしてシュートにおける運動投企の先取りができた点からは「リズム化能力」の発生を確認することができた。また、オーバースローという鋳型化された動きを解消し、サイドスローという新たな動感メロディーを確立させた点から「解消能力」の発生を見ることができた。

例証における促発能力の発生様態

- ①「観察能力」…「テキスト発見能力」を駆使し、テイクバックや倒れ込みの仕方など、T君に努力目標となる「道しるべ」を持たせるための課題を見出すことができた。
- ②「交信能力」…「借問能力」を駆使し、「今のはどんな感じだった？」などと質問を行いながら練習する中で、言葉にしにくい運動感覚をT君から紡ぎ出すことにつながった。
- ③「代行能力」…「住み込み能力」を駆使し、肘を下げない感覚など、T君が新たに図式化しつつある運動感覚世界に共生することができた。
- ④「処方能力」…「道しるべ設定能力」を駆使し、先に述べた五つの手立てをT君に合った「道しるべ」として処方し、段階的な練習を見出すことができた。また、「運動感覚呈示能力」を駆使し、「上からびんたする」、「ダルマ落とし」などの言葉かけや身振り、手振りを交えることでT君の動く感じを充実させることにつながった。

結論

左サイドシュートの指導実践例の分析から、指導者と学習者のつながりを通じた創発と促発の関係が相互に発生していることを再確認することができた（図3、4）。指導者はその学習者の運動を観ることができなければ、目標像を確認することも、今ここで問題となっている事柄も発見することができず、その学習者に合った手立てを処方することができない。学習者の実態を把握した上で、その時々に応じた手立てを処方していくことが指導者側に求められる能力であるといえる。そして、このプロセスの中で学習者を観察し、共感する中で学習者の世界に住み込み、その人に合った手立てを処方することが本当の指導であり、本当の教材づくりといえるのではないかと考える。以上より、繰り返し練習する中で「自動化」させることにより、実際のゲームという状況下で「私はできる」、「私は応じられる」ようになるのである。加えて、さらに個々の学習者に応じた習得に適した教材を志向していくことを今後の課題として挙げたい。（※引用・参考文献省略）

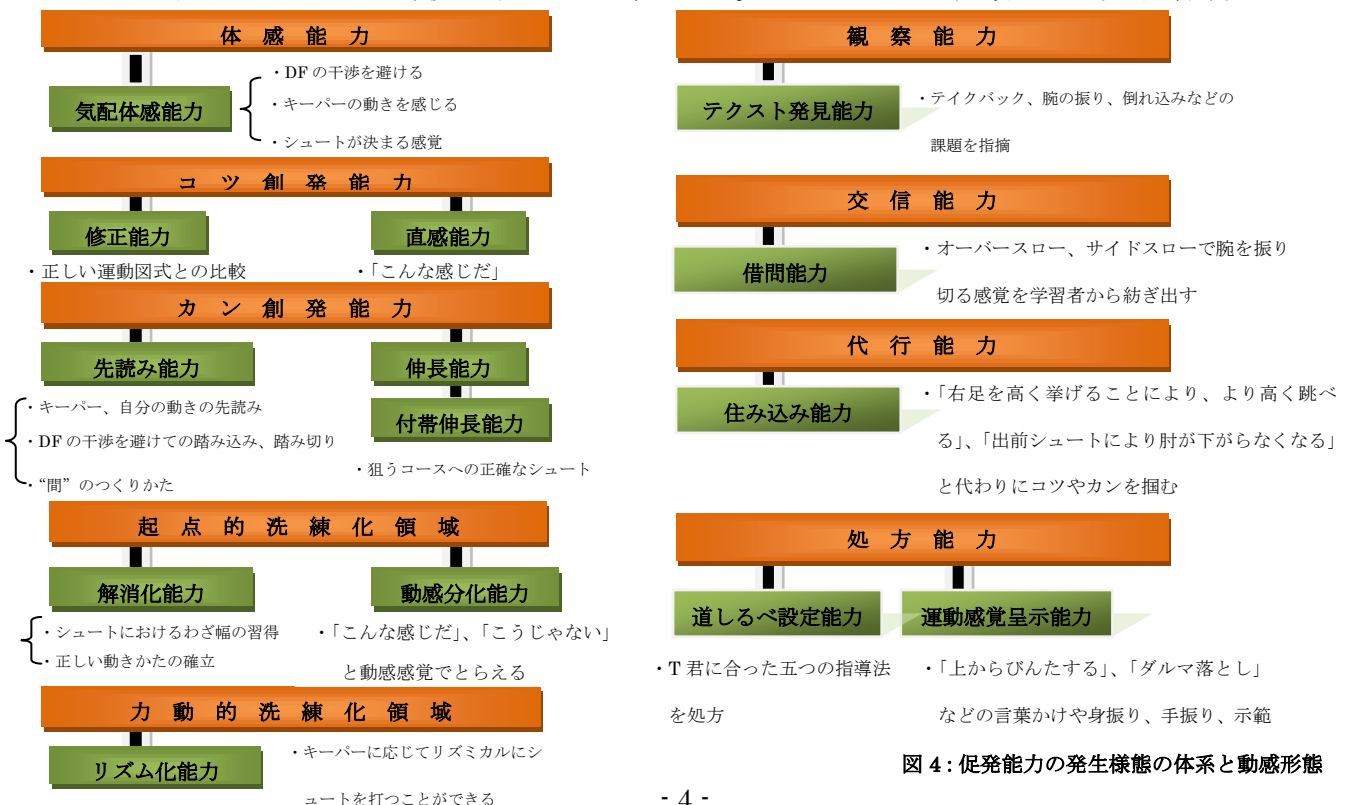


図4：促発能力の発生様態の体系と動感形態

図3：創発能力の発生様態の体系と動感形態